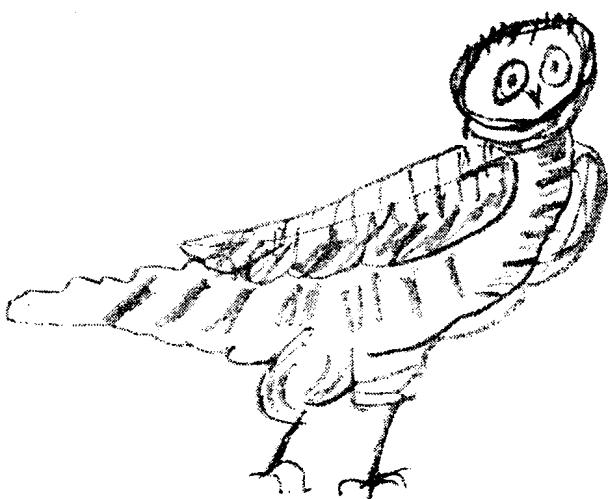


詩人に死が訪

詩人に死が訪れる時



耕治人

筑摩書房

詩人に死が訪れる時

昭和四十六年二月二十日 初版第一刷発行

定価 一、二〇〇円

著 者 耕 治 人

発行者 竹之内 静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二の八
電話東京(二九一)七六五一(代表)
郵便番号一〇一一九一
振替東京四一 二二三

印刷・多田印刷 製本・矢島製本

© 耕 治 人 1971

(分類) 0093 (製品) 80064 (出版社) 4604

目

次

い
ず
み

七

ざ
ぼ
ん

二

詩人に死が訪れる時

七

で
ん
び
ん

二
五

か
た
み

一
九

*

あこがれ

一七

八大山人

二〇五

暴力

三九

あとがき

二五三

題字・装幀

中
川
一
政

詩人に死が訪れる時

い

ず

み

一

その泉は、生母の記憶と結び付いていた。結び付いているということさえ知らなかった。完全に忘れていたのだ。なにしろ八つときだった。生母は、その年死んだのであった。

それから三十三年経っている。このあいだその泉を思い出したことは一度もなかったのだ。それなのに近所の人が、次ぎ次ぎ死んでゆくとき思い出したのであった。なぜ思い出したのだろう。生母は、病を養うため転地療養したが、そこにその泉はあったのであった。

私はそこへ父に言付けられ、一度行ったことがあった。そしてその泉を見たのであった。泉は、生母が借りた部屋から眺められるところにあった。

生母は、その療養先から、家に戻ると間もなく死んだのであった。

近所の人が次ぎ次ぎ死ぬので、生母の死と結び付いた泉を、思い出したのだろうか。私はそのことを考えるようになったのだ。

それは戦争が終つて、三年経っていたが、戦争が終つた年の、昭和二十年三月には大空襲があつて、多くの人が死んだのであつた。それから一カ月あまり経つた五月には、又大空襲があつた。

小さな空襲（？）は数え切れない位で、家が焼け、人が死ぬのは日常茶飯みだいだった。

しかし自分が死ぬこととそれは別問題だった。自分と自分の家族、財産を守るため防空壕掘りがはじまつたのは、いつからだろう。

私は昭和十八年徴用され、飛行機工場の、機械組立工だった。飛行機の部分品である気化器を、分解し、組立てたが、合間に、防空壕掘りをした。それは翌年の六月頃からではなかったろうか。工場の、建物と建物のあいだに簡単な素掘りの、壕があつたが、大勢の工員を避難させるため、工場の裏手の運動場に長い、長い壕を掘ることになったのであつた。

運動場という言葉は、適切でないかもしれない。全国各地から集まってくる徴用工の、訓練をそこでやるのであつた。一番早い時期の、徴用工を一期と呼び、二期、三期となるに従い年齢層は高くなり、私達は十八期だったように覚えていたが、子供の二人や三人ある年齢で、それは戦争が長びいた証拠であり、又戦局がかんばしくない証拠でもあつた。

徴用でない工員は、私達を『徴用』と呼び、そこにはなにやら輕蔑に似た響きがあるのであつた。

壕掘りをやらされるのは『徴用』だった。壕の深さは、胸のあたりまで、ミミズが這ったように曲りくねっていた。壕のなかでしゃがむと、青い空が見えた。フタがないから、安全といえないような気がした。

会社の幹部の人たちのために、別に頑丈な地下壕があるという噂だが、私は見たことがないから、真偽のほどはわからない。

しかし身分、地位、財産によって差別が生れるのは確かなようだ。それは東京の西のはずれの豊島・長崎町にある私の家のまわりでも、東の端の、誰その近所でも同じことだろう。

私の家と路地を隔てた末永家の防空壕は、出来上るまで二カ月位かかったようだ。トラックで土を運ぶだけでも一週間位かかったように思う。

トラックを使うということがすでに贅沢な時世だった。私が牛込肴町のアパートからその家に越してきたのは前の年の十月だったが、トラックが見つからず、馬車で、荷物を運んだのであった。

末永は何とかという会社の、社長だそうだが、前庭の片隅に、赤味を帯びた土が山のように盛上ったのを、私は工場に出かけるときも、帰ってからも見ることがあった。どうしてそこへ作ることにしたのだろう。裏庭には大きな石が、いくつかあり、いろいろな種類の木が繁っていた。私の家の門と、末永家の裏門は、路地を隔てて向い合っていた。壕は、裏門入って右側

にあった。他家の壕をセンサクしても仕方がないが、手入れのとどいた生垣越しに、壕が出来てゆく様子が、よく分るのであった。

それは工場で、徴用仲間と、壕掘りをやるようになったため関心を持ったのかもしれない。牛込肴町のアパートにいたときは、防空壕は、よその世界のことのようだった。自分の命が惜しくないはずはないが、壁を隔てた両隣も関心はないようだった。壕を掘るにも空地がないということもあったのだろう。アパートの人達は空襲の際は近くのお宮に避難することになっていた。大切なものは身につけるが、身につけられない家財道具は焼けたら不運とあきらめる——ということになっていたのであった。

しかし実は誰も敵機がやってくるとは思っていなかったのだ。それはアパートの人達だけでなく、国民の大部分の気持ちだったと思う。敵機が来る前、我が方が勝って、戦争は片附くはずだったのだ。

その後アパートが取毀しとりこわになったのは、来ないと思っていた敵機がきたからだだった。家が密集していたので爆弾や焼夷弾が落ちたら、大きな災いになることが予想されたからだだった。

アパートの人達は、引越先を求め、移っていった。私は、末永家と路地を隔てたその家に越してきたのだが、その頃はまだ末永家には防空壕はなかった。

末永家だけでない。私の家の隣もその向う隣にもなかった。あたりには空地があるし、木も

多い。表通りを右の方へ少しゆくと広々とした田圃だった。

こんなところへ爆弾や焼夷弾を落としたところで効果はないのだ。私はそう考えたのであった。近所の人達と話合ったことはないが、同じような気持だったのではなからうか。

ところがその家に移って三月経った夜の八時頃、敵機は真上まうえにやってきた。大急ぎで身仕度し、猫のヒタイ程の庭に、トランクや行李を投出し、妻のひろ子と表通りに出た。近所の人たちは、あっちこっちに固まっていた。

そのあいだも物凄い地響きがした。焼夷弾のためあたり一面異様な光に照し出され、死ぬかもしれない私は思ったのであった。

しかしそんなときも泉のことは浮ばなかったのだ。その泉は東京にあるのでない。遠く離れた熊本県八代町やしろ（いまは市だが、そのじぶん町だった）の、町外れにあった。普段でも八代町のことを思い出すことはないのだから、空襲の最中に思い出すはずがない。

私が八代町にいたのは旧制中学の四年までだった。四年修了後熊本市の、済済費中学に転校した。なぜかというとその町の、セメント会社に勤めていた父が死んだからだ。父の故郷は同県北部の、鹿本郡山本村だった。八代町には親戚もないし、父が死ぬと、八代町にとどまる理由がなくなった。それで残された家族は、熊本市へ移ったのであった。

熊本市にいたあいだも泉のことを思い出したことはなかった。熊本市の済済費中学を卒業し

た私が、東京に出たのは、或る専門学校に入るためだった。そこを卒業したが、熊本市に帰らず、今日まで東京で暮してきたのであった。

その間幾度か住所を転々した。しかし熊本市と山本村へ時々帰ることは忘れなかった。熊本市に帰るにはその頃汽車で二十三時間かかった。

熊本市には私の義理の母——生母の死後二度目の母がきた——がいたし、山本村には父や兄たちの墓があつた。そんな場合も泉のことを思い出したことはなかったのであつた。

それなのに近所で次ぎ次ぎ死人が出ると、思い出したというわけだ。

最初に死人が出たのは末永家でない。一軒置いた隣の時田家だった。若い主人の時田が死んだのである。しかし彼には誰でもうなずける原因があつた。彼が死んだのは戦争が終つた年の、十一月だった。

二

私の家は六畳、四畳半の二タ部屋で、同じ作りの家が六軒並んでいた。時田は工員だった。

どこの工場か聞いたことがあるが、忘れた。彼は徴用工でない。私は徴用になるまで或る小さな出版社の嘱託だった。もともと丈夫な身体でないから、工場の防空壕掘りは止むを得ないが、自分の家を作ろうとは思わなかった。それだけの氣力も体力もないと思つていた。他家の壕に